

## 鳴子から帰ってきた今晃君

清 俊夫

鳴子の岡崎斉司さんのもとでの修行を終え、弘前に戻ってきた今さんに初めて会ったのは、昭和 56 年 11 月末のころのように思う。当時、弘前城の北東の角、亀甲町に観光用の大きな駐車場を備えた「ねぷたの館」が開設され、こけしの実演即売の施設「こけしの館」が作られた。そこには、轆轤が 3 台すえつけられ、本田功さんを中心にして、今さんの弟弟子の長谷川健三さんと 3 人で仕事をしていた。今さんは、長谷川辰雄さんのもとを弟子上がりしたのち、一時本田さん宅に同居してこけし作っていた時期があった。鳴子の岡崎斉司さんへの弟子入りも本田さんの紹介があったようである。その経緯もあり、轆轤を持っていなかった今さんは、弘前に戻るにあたって、「ねぷたの館」で働くことを決意したのであろう。住まいは、弘前市の市街を離れ、リンゴ畑に囲まれた金属団地に置いた。



今さんは、毎日「こけしの館」に出勤してきたが、しばらくの間こけしは挽かなかった。独楽や独楽入りの入れ物、轆轤製品の装飾品などを作って、商品棚に陳列していた。ただし、その間、「自らの作りたいもの、作るべきものを必死で構想し、試作していたのではないか」と思っている。

私は、今さんの再開初作を手に入れたのは、昭和 57 年の 1 月 23 日であった。横浜市の太浦泰英さん依頼の細胴の 4 寸（通称ペンシル型）と嵌め込み黄胴笑い口・帯 4 寸であった。これらは、太浦さんや東京・下井草の「おおき」店主大木幸蔵さんに送ったものの離れであったように思う。形態的には完成度の高いものであったが、表情は硬さの残るものであった。後に今さん自身より、「昭和五十七年一月十一日 今晃」の墨書の入った造り付

